

南吉に魅せられて



研ぎ澄まされた美しい文体で多くの物語を紡いできた新美南吉。その作品の世界は、今、さまざまな表現によって姿を現し、広がっています。それらのうち、ほんのいくつかをご紹介します。

人形劇

人形劇俳優 たいら じょう
「ごんぎつね」

人形は、きつねの頭と尾のみ。舞台には黒い平台が一つだけ。たいらじょう氏の創りあげた人形劇「ごんぎつね」は、余計なものを極限までそぎ落とし、観客の想像力が入り込む余地を残した中で繰り広げられます。「ごん」以外の人物については、彼自身が俳優として演じるのだといいます。「舞台の上には彼岸花もないし、川も流れていない。でも、そこに存在しないものを見ることができなのが、演劇のいちばんの魅力です。『彼岸花が赤いきれのように咲き続く』景色をお客さんに見せたいときに、それを絵で描いてしまったらそこまで。私は、受け取り手それぞれに、自分がいちばん美しいと思うその景色を想像してもら

いたい。たぶん、原作者の新美南吉もそう願っているはず。だから、あえて描かずに、私の演技を通して想像してもらうんです」と、彼は語ります。それぞれの想像力にゆだねるからこそ共感が生まれ、それが見る者の心を動かすのでしょうか。

作品「ごんぎつね」との出会い、小学校の教科書でした。読んで衝撃を受け、人形劇俳優として生きる中で、この作品は当然、演じるべきものであると思い続けてきたのだといいます。他の人たちの舞台を見るにつれ、「自分の思う『ごんぎつね』はこう。自分の思う『ごんぎつね』を作らなきゃ」という思いが高まり、創作に至ります。彼は続けます。「私の人形劇は、『見る文学・見る読書』だと思っています。五感を使い、どっぷりと作品に浸り、新美南吉の本を読み終えたときの幸福感・満足感を味わってもらいたい。たいら氏の人形劇を通し、南吉の思想や世界観にいつそう近づ

人形劇俳優 たいら じょう

1981年、北海道生まれ。操演者自らも参加しながら進行する独自のスタイルで、全ての役柄を一人で演じ分けるとともに、脚本・演出・音楽・美術も手がける。子ども向けのオリジナル作品の厚生労働大臣表彰など受賞多数。

公式ウェブサイト：
<http://tairajo.com>



演劇

劇団 オクムラ宅
「新美南吉の日記
1931-1935」

新美南吉自身の生き方を取り上げた演劇。南吉の残した日記や詩をもとに、彼の十八歳から二十二歳頃までの出来事が物語として描かれます。

脚本は、南吉の日記や詩の引用と、南吉の人物像を解説するような語りとで構成されます。脚本・演出家は奥村拓氏。彼によれば、本作品の劇作家として、「南吉を知

らない人には興味をもってもらう」「知っている人にはもっと興味をもってもらう」という二つの使命をもって作品作りに臨んだとのこと。

「南吉の作品が大好きで、演劇のモチーフに取り上げてみたいとずっと思っていました。あるとき、俳優向けのワークショップ用のテキスト探しをしていて、南吉の日記に出会い、これを題材に演劇を作ろうと思ひ至りました。僕の『新美南吉論』がダイレクトに伝わる脚本になっているはず」と語ります。奥村氏が捉え、魅了された南吉像に触れることができる作品といえるでしょう。

劇団 オクムラ宅

俳優・演出家の奥村拓が主宰する演劇ユニット。2010年4月に旗揚げ。同氏は、1980年、福井県生まれ。2012年10月、『まばたき』でAAF戯曲賞最終候補。

公式ウェブサイト：
<http://okumurataku.com>



アニメーション

「おちいさんのランプ」

南吉にとって初めての児童書の表題作「おちいさんのランプ」が脚色・アニメー

ション化された作品です。文化庁の若手アニメーター育成プロジェクトとして制作されました。

作中では、「村人たちの生活を明るくしたい」という主人公・巳之助の真つすぐな心根と、変わりゆく時代が、温かく色彩豊かに描かれています。ランプと電気の光の、微妙な描き分けは、見る者の目を奪います。



©TELECOM ANIME
テレコム・アニメーションフィルム制作/
25分/税込み1,400円
※公式ウェブサイトにて販売。
<http://www.telecom-anime.com>